

強い心を持つ

栃木県 大田原市立若草中学校 1年
上野 加瑞志（うえの かずし）

僕が父から病気のことを聞いたのは、五年生の冬のことでした。姉が大学に入ることが決まって、家族五人で旅行に行った後のことでした。父は、病気になってしまったこと、これから大変なことも出てくると思うけれども母を助けてほしいことをゆっくりと話しました。母は、

「今すぐ手術とか入院とかするわけではないし、今まで通りでかまわない。」
と言う意味のことを言ったような記憶があります。そのころ父は仕事もしていたし、車の運転もできていたので、僕は何か重たい気持ちになったものの、悲しいとか嫌だとかそんな気持ちにはなりませんでした。

父の病気は、全身の神経が病気になり、筋肉に命令が行かなくなる「筋萎縮性側索硬化症」と言います。僕たちに知らせる約一年前に発症していました。

「なぜ、僕の父がこの病気になったのだろう。」

と思い、調べてもみましたが、もちろん本人の意図的なものではないし、遺伝的なものでもなさそうでした。つまり、父は何も悪くないのに、重い病気を背負うことになってしまったのでした。

はじめの頃、左手が挙げにくかっただけの症状は、僕が小学校を卒業するときには両手がほとんど使えなくなっていました。今は、首の筋肉が使えなくなってきたので、歩くのもやっとなりで、食事も時間がかかります。トイレに行っても服が下げられないので、僕が手伝うこともあります。他にも、ベットから起こしたり、椅子を押さえたりという簡単な手伝いはしています。それを「嫌だ」とは思っていない。

しかし、友達が僕の家遊びに来ることになったとき、僕は車椅子を父の部屋に隠しました。なぜかという、僕は、

「父のことが知られたら、差別されるかもしれない。」

と考えたからです。家族の中では嫌でなくても、友達の家と違うことを知られるのが怖かったのです。

例えば、遊ぶ約束をしているときに、僕が断ると、

「まあ、お父さんのことがあるからね。いいよ。」

と言われるのが怖いのです。また、平日はヘルパーさんやリハビリの人が毎日家に来ていますが、そんなときは友達が家に来ないようにします。

友達は、心配していつてくれるのかもしれませんが。同情というか、気をつかつ

てくれてるかもしれませんが。でも、僕だけ仲間に入れたい気がして嫌なのです。僕に聞こえなくても、

「あいつ、大変だよな。」

と言われてるかもしれないと思ってしまうのです。

そんなふうに、父のことを隠す僕のことを父も母も責めませんでした。車椅子を隠したときも、担任の先生や部活の指導者さんに言わないで頼んだときも、僕の気持ちを優先してくれました。

でも、それでいいのだろうかとも思うようになりました。毎日症状が重くなっていて、自分の力で椅子から立つことも難しくなってきた父。それでも筋肉が少しでも長く使えるようにと、母に手伝ってもらいながら運動をしている父。こんなにがんばっている父を隠す僕はまちがっているのではないか、という思いが生まれたのです。それでも、友達に知られたくないという思いも強く、二つの感情が心の中で戦っています。

僕は今まで、「差別はいけない」とか「みんな違っていい」とか「障がいのある人にやさしく」とか、大切だと習ったことをわかっているつもりでいました。頭では理解していても、自分の父のことになると、そう簡単にはいきません。僕の心の中に、「人の違うこと」に対する恐怖があるからです。

僕は父のことを通して自分の心の弱さを知りました。「人権を守ろう。差別をなくそう」と言っても、心からそう思って実行するのはそう簡単なことではないこともわかりました。しかし、ここで止まってはいけないと思いました。まずは小さなことから始めてみようと思います。父の車椅子を押して、外出してみます。誰かに声をかけられるかもしれません。物珍しいという目で見られるかもしれません。「かわいそう」という声が耳に入るかもしれません。がんばっている父の手助けを人前でできるようになった時、僕の心は一步前進したと思います。そしていつか、友達にも話せる自分になりたいです。強い心を持つ自分になりたいです。